

【旧約聖書日課】ゼファニヤ書 3章14～18節

- 14 娘シオンよ、喜び叫べ。
イスラエルよ、歡呼の声をあげよ。
娘エルサレムよ、心の底から喜び躍れ。
- 15 主はお前に対する裁きを退け
お前の敵を追い払われた。
イスラエルの王なる主はお前の中におられる。
お前もはや、災いを恐れることはない。
- 16 その日、人々はエルサレムに向かって言う。
「シオンよ、恐れるな
力なく手を垂れるな。
- 17 お前の主なる神はお前のただ中におられ
勇士であって勝利を与えられる。
主はお前のゆえに喜び楽しみ
愛によってお前を新たにし
お前のゆえに喜びの歌をもって楽しまれる。」
- 18 わたしは
祭りを祝えず苦しめられていた者を集める。
彼らはお前から遠く離れ
お前の重い恥となっていた。

【使徒書日課】テサロニケの信徒への手紙一 5章16～24節

16いつも喜んでいなさい。17絶えず祈りなさい。18どんなことにも感謝しなさい。これこそ、キリスト・イエスにおいて、神があなたがたに望んでおられることです。19“霊”の火を消してはいけません。20預言を軽んじてはいけません。21すべてを吟味して、良いものを大事にしなさい。22あらゆる悪いものから遠ざかりなさい。23どうか、平和の神御自身が、あなたがたを全く聖なる者としてくださいますように。また、あなたがたの霊も魂も体も何一つ欠けたところのないものとして守り、わたしたちの主イエス・キリストの来られるとき、非のうちどころのないものとしてくださいますように。24あなたがたをお招きになった方は、真実で、必ずそのとおりにしてくださいます。

【福音書日課】ルカによる福音書 1章5～25節

5ユダヤの王ヘロデの時代、アビヤ組の祭司にザカリアという人がいた。その妻はアロン家の娘の一人で、名をエリサベトといった。6二人とも神の前に正しい人で、主の掟と定めをすべて守り、非のうちどころがなかった。7しかし、エリサベトは不妊の女だったので、彼らには、子供がなく、二人とも既に年をとっていた。8さて、ザカリアは自分の組が当番で、神の御前で祭司の務めをしていたとき、9祭司職のしきたりによってくじを引いたところ、主の聖所に入って香をたくことになった。10香をたいている間、大勢の民衆が皆外で祈っていた。11すると、主の天使が現れ、香壇の右に立った。12ザカリアはそれを見て不安になり、恐怖の念に襲われた。13天使は言った。「恐れることはない。ザカ

リア、あなたの願いは聞き入れられた。あなたの妻エリサベトは男の子を産む。その子をヨハネと名付けなさい。¹⁴その子はあなたにとって喜びとなり、楽しみとなる。多くの人もその誕生を喜ぶ。¹⁵彼は主の御前に偉大な人になり、ぶどう酒や強い酒を飲まず、既に母の胎にいるときから聖霊に満たされていて、¹⁶イスラエルの多くの子らとその神である主のもとに立ち帰らせる。¹⁷彼はエリヤの霊と力で主に先立って行き、父の心を子に向けさせ、逆らう者に正しい人の分別を持たせて、準備のできた民を主のために用意する。」¹⁸そこで、ザカリアは天使に言った。「何によって、わたしはそれを知ることができるのでしょうか。わたしは老人ですし、妻も年をとっています。」¹⁹天使は答えた。「わたしはガブリエル、神の前に立つ者。あなたに話しかけて、この喜ばしい知らせを伝えるために遣わされたのである。²⁰あなたは口が利けなくなり、この事の起こる日まで話すことができなくなる。時が来れば実現するわたしの言葉を信じなかったからである。」

²¹民衆はザカリアを待っていた。そして、彼が聖所で手間取るのを、不思議に思っていた。²²ザカリアはやっと出て来たけれども、話すことができなかった。そこで、人々は彼が聖所で幻を見たのだと悟った。ザカリアは身振りで示すだけで、口が利けないままだった。²³やがて、務めの期間が終わって自分の家に帰った。²⁴その後、妻エリサベトは身ごもって、五か月の間身を隠していた。そして、こう言った。²⁵「主は今こそ、こうして、わたしに目を留め、人々の間からわたしの恥を取り去ってくださいました。」

喜ばしい知らせを！【こども説教のために】

「待降節（アドヴェント）」は、「降誕祭（クリスマス）」という喜ばしい祝いに向けて備える一方で、冬の寒さと夕闇の深まる季節です。多くの照明が灯される生活の中で、わたしたちは、夕暮れの早くなることにも、朝の訪れの遅くなることにも、鈍感になっているかもしれません。けれども、「降誕祭」を迎える備えをしようというときに、わたしたちは、確かに一年でもっとも暗闇の深い季節を過ごしているのです。

初代の使徒たちの教会は「降誕祭」を祝うことを知りませんでした。にもかかわらず、古代教会の先達は、このもっとも暗闇の深まる季節に、主のご降誕を祝うときを設けることにしたのです。深まる暗闇の中、わずかなロウソクの灯を頼りにして「待降節」を過ごした先達は、「降誕祭」を迎えたときに灯す明かりを、どれほど待ちわびたことでしょうか。

先達の教会は、いつの頃からか、「待降節第3主日」を「喜びの主日」と呼ぶようになりました。「主のご降誕」の日の近いことを知った者は、喜びを隠しておけません。その日の訪れを、「喜ばしい知らせ」として誰かに伝えないではいられない思いになるのは、子どもたちばかりではないでしょう。

けれども、教会は、この「喜びの主日」に、御子のご降誕を告げません。御子ではない、別の一人の男の子の誕生を、告げるのです。「洗礼者ヨハネ」と呼ばれるようになる男子です。御子イエスと共に、その生涯を神と人にとり献げて歩んだ一人の人です。御子のご降誕を喜び祝う者は、そのような一人の人の誕生、新しい命の誕生をも喜ぶのです。

神の御前で

ちょうど80年前、1942年の12月11日の朝、ドイツ・ベルリン郊外の町にある一軒の家の扉に、小さな張り紙がされているのを見つけた者がいました。「ガスに注意」と記されたその張り紙をして、前夜、妻と次女と共に自宅で命を絶ったのは、当時のドイツで知らぬ者はいなかったという著名な作家、ヨッヘン・クレッパ―でした。

彼は、若くして作家として成功していました。ところが、二人の幼い娘を持つユダヤ人女性と結婚したため、牧師であった父親とは断絶、帝国作家協会からも除名されて作品を発表する機会を奪われていました。すでに多くのユダヤ人が強制収容所に送られ始めていた中で、クレッパ―は、長女ブリギッテをイギリスに移住させますが、幼い次女レナーテはギリギリまで自分たちの手元に留めたいと願っていました。ところが、いよいよ次女も出国させなければと判断したときには、時すでに遅かったのです。出国は認められず、それどころから、妻ハンニ（ハンナ）と強制的に離婚させるという脅しまで告げられることになったのです。離婚は、すなわち、妻と次女の強制収容と死を意味していました。次女の出国の可能性が完全に断たれた日、クレッパ―は、二人と共に自ら死を選ぶことを決意したのです。

クレッパ―が、その数年前、作家としての発表機会を奪われながら残っていた小さな宗教詩集の多くは、戦後、ドイツの教会で讃美歌として歌われるようになりました。その一つが、243番「闇は深まり」です。原題は、ただ「聖夜の歌 Weihnachtslied」と記されていたものです。

243番の日本語訳には意識翻案された箇所もあるようですが、概ね原詩に沿ったものでしょう。これを、わたしたちは、待降節の讃美歌として歌っています。待降節に自ら死を選んだクレッパ―のことを想起せずに、この讃美歌を歌うことはできないのです。

暗闇の深まりは、わたしたちを沈黙させるかもしれません。洗礼者ヨハネの誕生を告げられたザカリアが、その知らせを受けとめきれずに口が利けなくなったように。喜びの知らせを聞かされても、その知らせを覆い隠してしまうほどの暗闇に包まれている者には、喜びを口にし、誰かと分かち合うことは、難しいことなのかもしれません。

それでも、暗闇がどれほど深くても、喜びを口にすることが難しくても、わたしたちが、誰かと共にいることが許されるならば、そこには希望がある。

そのことを、わたしたちは、知っています。神の御前に集うようにされたわたしたちは、知っています。いいえ、先達から教えられ、知らされてきました。暗闇の中でも、沈黙の中でも、神の御前に集められた者として、わたしたちが皆、共にあり続けるべきことを。

《神の前に立つ者》

待降節のただ中で自ら死を選んだクレッパーは、その最後の日記に、こう記していたと伝えられています。「この最後の時、私たちのために闘ってくださるキリストの祝福する像が、私たちの頭上に立っている。その眼差しの中で私たちの生は終わるのだ」(川端純四郎著『さんびかものがたりⅡ～この聖き夜に』より)。

クレッパーら三人は、最後まで共にあることを望んだのでしょう。キリストの御前で、自ら死を選んだとしても、そうあることが赦されると信じて、そうしたのでしょう。「ほかの選択肢もあったのでは」と、第三者は言うことができるかもしれませんが、けれども、彼らは、自分たちが共にあり続ける道は他にないと、決断をしたのです。その決断を、だれが責めることができるでしょうか。その決断を、神がお赦しにならないなどと、誰が言えるでしょうか。彼らの決断は、自ら十字架の死を引き受けられたキリストの眼差しの中で行われたことだったのです。

今、降誕祭を迎える備えを重ねているわたしたちは、彼らのように深刻な状況に置かれている者ではないかもしれませんが、ただちに何かを決断しなければならぬような緊急事態に見舞われているのでもないかもしれません。けれども、わたしたちの生きるこの世界は、80年前の世界とさほど大きく変わってもいなければ、暗闇が解消されたわけでもないことを、わたしたちは、知っています。いいえ、80年前の世界にも、自分たちが深い暗闇の中に置かれているとは思ってもせずにいた人々がいたのです。わたしたちは、その人たちとどこが違うと言えるのでしょうか。

ザカリアは、神殿の祭司として神の御前で務めを為していました。それは、当番で巡ってくる務めでした。自分が神の御前で為す務めに就いていることを、彼はもちろんよくわかっていたはずです。そして、彼がその務めを果たせるようにと、祈って待つ大勢の人々が、神殿の外にはいました。

ザカリアは、正しい人だったのでしょう。けれども、彼が知らなければならないことが一つ、あったのです。「ガブリエル」の存在です。「**神の前に立つ者**」と共にいることです。その者が告げてくれることに耳を傾け、信頼することです。「神の前に立つ者」が、彼自身だけでなく、そこに現れたガブリエルだけでなく、彼の周りに大勢いることに、彼は気づく必要がありました。神殿の外には、彼の務めのために祈って待つ**大勢の民衆**がいたのです。彼らは、間違いなく、ザカリアと共に「**神の前に立つ者**」としてそこにいた「ガブリエル」の一人に違いなかったのです。

神の前に進み出てきた者は、神の前に立つ者を見るようにされるのです。これは、降誕の祝いへと進み入るための、わたしたちの備えなのです。